

イザヤ書第66章10～14節

ガラテヤの信徒への手紙第6章《1－6》、7～16節

ルカによる福音書第10章1～12、16～20節

試用版の聖書日課を用いていますが、本日の箇所は、使徒書の箇所が少し変わっただけで（ガラテヤ6:14-18から6:1-16へ）、旧約日課と福音書は全く同じです。

旧約日課は、イザヤ書の末尾ではありませんが、ほぼ最後の部分です。バビロン捕囚の終了、捕囚からのイスラエルの解放に関する預言です。その解放は、「エルサレムと共に喜び祝い彼女のことによって喜び躍れ、彼女を愛するすべての人よ。彼女と共に大いに喜べ彼女のために嘆いていたすべての人よ」とエルサレムの復興の喜びを中心に語られています（イザ66:10）。また、「母がその子を慰めるように、私はあなたがたを慰める。エルサレムで、あなたがたは慰めを受ける」（イザ66:13）と、エルサレムにおいて人々が慰められることを題材としても語られています。イスラエルの中心はエルサレムと認識されています。南北に分裂したイスラエルの南の方だけが注目されているのですが、他方で、バビロン捕囚からの解放の出来事をもたらしたのは、世界史的にはペルシア帝国です。預言者イザヤはその異国の王であるキュロスをメシアとしてとらえるのです（イザ45:1など）。それはイスラエルという存在が、単なる民族的枠組みではなく、それを超えた主なる神様の正義と平和の具体例ととらえているからです。

本日の旧約日課は、13節を受けて、「これを見て、あなたがたの心は喜び、あなたがたの骨は青草のように萌え出でる。主の手はその僕たちに知られ、その憤りはその敵に向けられる」（イザ66:14）で終わっています（「萌え出でる」現代的訳です。新共同訳「育つ」、口語訳「栄える」）。ことに「その（主なる神様の）憤りは、敵に向けられる」と終わっていますので、イスラエルの社会的・歴史的勝利を語っているように思えますが、そうではありません。聖書日課の範囲を超えますが、その後にも続きがあります。

66章全体の聖書の小見出しが「主の栄光が現れる」となっている通り、その後の続きは、「主は火によってまた剣によって、すべての肉なる者を裁かれる。多くの者が主に刺し貫かれる」（イザ66:16）という、終末的審判を想起させるような描写を伴いつつ、「私は彼らの行いと考えを知っており、すべての国と諸言語の民とを集めるために来る。彼らは来て、私の栄光を見る」（イザ66:18）と、イスラエルを題材として、すべての人が主なる神様のもとに集められる情景を語ります。そして、「私の造る新しい天と新しい地が、私の前にいつまでも続くようにあなたがたの子孫とあなたがたの名もいつまでも続く——主の仰せ」（イザ66:22）と、新しい天地創造が行われるかのような、終末的視点を持った希望が語られるのです。もっとも66章全体が、本当に一つのまとまりとして書かれたのか、また本当にイザヤ書全体の末尾の部分であるかどうかは、議論があるところです。ことに現在の聖書にあるイザヤ書の末尾は、「彼らは出

て行き、私に背いた者たちの死体を見る。それに付く蛆は絶えずそれを焼く火は消えることがない。それは、すべての肉なる者に忌み嫌われる」（イザ 66：24）ですから、希望からもう一度絶望的な情景を見せられて終わっているように思えます。それは、イザヤ書が語る希望が、人間の短期的視点や自己中心的欲求の充足にとどまらない希望であるからです。また、同時に、簡単には実現しない希望であるからです。しかし、そうであるがゆえに、終末的希望なのです。また、わたしたちは、現実には起きている現象の一つひとつに、最終的な希望も絶望も見出す必要はないのです。今からだいたい2500年前に書かれたイザヤ書の預言が、今でも実現していないわけですから、そこに示されている希望は、今日のわたしたちにとっても、また未来において希望であり続けるのです。

もちろん、わたしたちは、イザヤ書が想定している時代の人々とは異なります。イエス・キリストを信じているからです。パウロは、本日の箇所です。「しかし、この私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この方を通して、世界は私に対し、また私も世界に対して十字架につけられたのです」（ガラ 6：14）と語ります。人間にとって誇ることができるものは、イエス様の十字架以外にないという確信です。そしてそこから、「この方を通して、世界は私に対し、また私も世界に対して十字架につけられた」と、その信仰的確信が、自分という存在にとどまらず、世界に関わることを語ります。イエス様を信じるという信仰者一人ひとりの個人的な事柄が、世界に関わるといことです。それゆえに、パウロは、「割礼の有無は問題ではなく、大事なものは、新しく造られることです」（ガラ 6：15）と続けます。ここにある「新しく作られること」は、直訳すれば「新しい創造」です。そして、「創造」という言葉は、マルコ福音書で「天地創造」（マルコ 10：6）と訳されている言葉でもあります。パウロは、キリスト者を新しく創造された存在であると同時にその新しい天地創造の担い手であるととらえているのです。そして、「この基準に従って進む人々の上に、また、神のイスラエルの上に、平和と憐れみがありますように」（ガラ 6：16）と手紙を終えます（実際には 17、18 節がありますが、そこはあいさつ文です）。「神のイスラエル」という表現は、もちろん「教会の人々」のことを指します。パウロが、イザヤ書をどれほど意識していたかはわかりませんが、明らかに、イザヤ書が語る希望が、イエス・キリストの十字架を通して新しい形で示され、その希望に生きる存在であり、希望の実現を担う存在がキリスト者であるととらえているのです。

十字架の信仰に立つ限り、わたしたちは一人でも世界と結びつきます。そこに慰めと希望があります。そして、わたしたちは一人では決して大きなことができなかつたとしても、信仰者一人ひとりが、世界と十字架を通して結びついているからこそ、主なる神様の栄光を示すことができます。その歩みをこれからも続けたいと思います。教会は家族単位で関わったとしても、個人として関わったとしても、また、何世代にわたって関わったとしても、自分の代だけであったとしても、十字架の信仰に基づく地上と天上との結びつきを持ちます。ことにわたしたちの聖公会は、一つの教会を超えて結びつきを持ちます。教区という単位が一つのしるしですが、すべてのキリスト者が結びついていることの恵みに気が付くことができるように、これからも歩みたいと思います。